



建学の精神

「我らは神と共に働く者なり」
(コリントの信徒への手紙一 3章9節)



広島女学院 校章・マーク
「信仰の盾」(エフェソの信徒への手紙 6章16節)を象徴し、ラテン語「CUM DEO LABORAMUS」は、「我らは神と共に働く者なり」(コリントの信徒への手紙一 3章9節)という意味です。アヤメは、泥中に育ちつつも優雅と純潔を誇り、初代校長ゲーンズが愛した花です。

学校法人 広島女学院

〒732-0063 広島県広島市東区牛田東4-13-1

TEL : 082-228-0386 FAX : 082-227-4502



創立

広島女学院創立の端緒は、広島の一青年 砂本貞吉が船乗りになることを目指して1882年(明治15)イギリスへ渡る途中、寄航したアメリカ・サンフランシスコで聖書とキリスト教に出合ったことに始まります。ギブソン夫人から聖書を与えられた砂本は、彼女の心の温かさ、親切さ、信仰心は聖書の教えからくるものだ、と気づき、入信しました。5年もアメリカに滞在した砂本は、母親思いの人でしたので「母に福音を伝えたい」と願って帰国しました。青山学院学院長のマクレーに面会を求め、広島伝道について相談すると、神戸にいるアメリカ南部メソジスト監督教会のランバス父子を紹介されました。

ジェームス・W・ランバス夫妻と息子のウォルター・R・ランバスは、1886年(明治19)来日。神戸を拠点に伝道活動や教育・社会事業を展開し、広島女学院、関西学院、聖和大学、啓明女学院、バルモア学院などを設立。1998年(平成10)には、ランバスリーグが協定を締結しています。

父ランバスは、砂本に「あなたはパイロット(水先案内人)を務めてください」と言って、子息であるウォルターの派遣を約束しました。1886年(明治19)聖書・英語・裁縫などを教える私塾として〈広島女学会〉が始まり、初期のころの詳細は不明ですが、広島女学院はこの年を創立年としています。翌年、ほかの二つの私塾も合流。アメリカからナニー・ベット・ゲーンズが派遣され、広島における最初の女学校として〈私立英和女学校〉がスタートしました。

広島は安芸門徒といわれる浄土真宗の信仰が強い土地柄で、キリスト教に対する風当たりは厳しいものでした。1889年(明治22)仏教系の広島高等女学校が創立して生徒の引き抜きが相次ぎ、またアメリカの経済恐慌の影響で伝道局が経済的に困窮したことから、私立英和女学校は中断の憂き目を見ます。しかし、翌年、再び開校。広島美以教会(現・日本キリスト教団広島流川教会)も設立されました。

1896年(明治29)総合化を期して〈私立広島女学校〉と改称。1932年(昭和7)校名を〈広島女学院〉と変え、幼稚園、小学校、高等女学部、専門学校を持つ総合学園となりました。

創立の背景と歴史

創立者 砂本貞吉は、母へ福音を伝えたいという気持ちから伝道活動を始めましたが、母以外のほかの人にも自分と同じ喜びを伝えたい、という情熱を持ったことがランバスを動かしました。当時、各教派によって日本伝道が活発に行なわれていましたが、アメリカ南部メソジスト監督教会は他教派から出遅れた状況にあったのです。北陸に赴くか、瀬戸内に行くか、と迷っていたランバスの背中を押したのが砂本でした。ランバスはこの出会いを「マケドニアン・コール」(使徒パウロがマケドニア人が招く夢を見て、主イエスがギリシャ伝道に行くように命じたと言ったという聖書の話)と呼びました。

また、砂本の要請によって広島に招聘されたゲーンズは、新築の校舎が台風で倒されたり、不審火で焼失したり、予期せぬ困苦の連続の中でも、失意落胆することなく、毅然として前進を続けました。日頃生徒たちに「チェストアップ」と声をかけ、うつむき加減に生きている日本の女性に胸を張り顔を上げて、自信を持って歩むように促しました。72歳で亡くなるまでの45年間、広島の地でキリスト教と女子教育のために働き、校母と慕われたゲーンズの逝去にあたり、外国人の埋葬が認められなかった比治山に、広島市が特例を認めたのは彼女の働きに敬意を表したためと思われる。広島女学院の育ての親であるゲーンズの墓碑には、「我らは神とともに働く者なり」と刻まれています。

明治末から大正にかけて、官公立学校が設立され内容も充実してくると、私立広島女学校も変革を求められるようになります。ゲーンズは勇退して、S・A・スチュアートに2代校長を譲り、その基礎づくりが果たされました。スチュアートが病で退任後、日本人として初めて校長になったのが日野原善輔です。関西学院大学卒業後、アメリカ・ノースカロライナ州トリニティー大学に進み、神戸中央メソジスト教会(現・神戸栄光教会)の牧師に就任します。

日野原が牛田の山に敷地を準備したことは、のちに重大な意味を持ちました。五日市に購入した土地が、戦時下の物資不足で活用できないまま、陸海軍から使用中止を迫られ、代替え地として入手した牛田の山に、日野原は心身鍛錬と勤労作業のための修練道場をつくりました。1945年(昭和20)8月6日、広島に原爆が投下され、生徒・教職員350名が死亡(被爆後1年以内の死亡者のみの数)、校舎、施設のすべてを失ったときに、ここが広島女学院にとって救いの場となったのです。

日野原の後を受けて4代校長に就任した松本卓夫は、青山学院神学部在籍の新約聖書学者でした。被爆時に夫人を失い、自身は奇跡的に助かりますが、病身を押し付けて収容施設を回り、生徒たちの安否確認に明け暮れました。9月には、原田寿校女教頭とともに支援を求めて呉のアメリカ軍第10軍団司令部のチャプレンを訪問しますが、得られたのは精神的励ましと、ポケット判英語聖書だけだったといえます。このような苦難にもくじけず、全学挙げて再興に取り組み復興を果たしました。中でも、保護者会の守屋義直は校舎再建の中心となって尽力しました。

ヒロシマに置かれた学校として、平和の問題に取り組むことを使命とする思いは変わることがありません。



創立者 八代斌助
やしろ ひんすけ (1900~1970年)
世俗的な庶民性を身につけた、型破りな性格で、東奔西走の働きで「世界のヤシロ」と呼ばれました。

